

順治二年（1645）の蘇州（6）

滝野 邦雄

六月三日

楊文驄は、清政権の軍が無錫に到着したとの情報を聞き、蘇州府の府庫から銀を取りだす。

初三日、楊文驄 北兵の已に無錫に至るを聞き、遂に府庫の銀を發して兵丁に分給し、自ら萬餘金を取る（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）六月三日」条・二〇六頁）。

（三日、楊文驄は清朝の軍がすでに無錫に到着したことを聞き、蘇州府の金庫の銀貨を持ち出し、兵士に分けあたえ、一萬銀あまりを自分のものとした）

『蘇城記變』は、この事件をつぎのように伝える。

・・・[楊]文驄は、「色 厲しく内 荏なり^①」。北兵の且に至らんとするを偵知し、遂に六月三日の昧爽（黎明）に於いて鼠竄（鼠のようにあわただしく逃走する）の舉を爲す。[楊]文驄 一たび去りて、人心 益々惶悚にして措く無し（『蘇城紀變』不分卷・二葉・國學保存會印『國粹叢書』第三集・光緒三十二年（一九〇六）發行）。

①『論語』陽貨に「子曰、色厲而内荏、譬諸小人、其猶穿窬之盜也與（子曰く、色 ^{しつ}厲しくて（外貌の威厳がある）内 ^{やわ}荏らか（内心の柔弱なこと）なるは、諸を小人に譬えれば、其れ猶お穿窬（壁を穿ち牆を乗り越える）の盜のごときか）」。

（楊文驄は、外見ばかりの恰好づけで中身はまったくだめであった。清朝の軍が到着しそうだということを察知して、六月三日の朝方に、鼠のようにあわただしく逃げ出してしまった。楊文驄が行ってしまうと、人々はますます恐れおののいてどうしようもなくなった）

『金陵野鈔』では、順治二年六月、女直（清）の軍が蘇州に入城した。これより前に、楊文驄が蘇州に逃げ込んだ。女直（清）は、鴻臚寺少卿であった黃家鼎を派遣して、蘇州を安撫しようとした。ところが、楊文驄はそれを殺した。女直（清）の軍がやってくると、楊文驄は逃げた、という。

[順治二年] 六月、女直（清）蘇州に入る。是れより先、楊文驄 奔り蘇州に至る。女直（清）前の鴻臚寺少卿の黃家鼎を遣りて蘇州を安撫さす。[楊]文驄 之を殺す。女直（清）の兵 至り、[楊]文驄 ^に走ぐ（『金陵野鈔』全一卷・「[順治二年] 六月」条）。

朱子素の明季稗史初編本『嘉定屠城紀略』¹⁾は、

・・・數日の後、明・監軍道の楊文驄 兵五百を率いて郡城に入る。[黃]家鼎等を執え市に戮し、府庫の銀を發取して滿載にして去き、之く所を知る莫し・・・（都城琉璃廠留雲居士排字本『明季稗史初編本』卷十三所収『嘉定屠城紀略』・「乙酉五月初九日、南都破、弘光

出亡」条・一葉)。

とする。明・監軍道の楊文驄は、五百人の兵士を引き連れて蘇州城内に入った。そして黄家鼐たちを捕らえて城内で処刑し、蘇州府の金庫の銀を取り出して車いっぱいにして、どこに行ったかわからなくなった、というのである。

康熙年間後期に書き終えられたとされる(中華書局 1559 年出版『南疆逸史』前言による)溫睿臨(字は鄰翼^{りんよく}, 一字は令貽^{れい い}, 号は晒園^{しんえん}。浙江烏縣(今の吳興)輯里の人。康熙乙酉科(康熙四十四年:一七〇五年)の舉人)の『南疆逸史』の「楊文驄」傳は、「楊文驄」を「姦佞」に分類して、つぎのようにいう。

……五日、[楊文驄]は蘇州に至り、南京 守りを失い、豫王の遣る所の安撫使の黄家鼐 且に至らんとし、蘇州の吏民 迎えて入城すと聞く。次日、[楊]文驄 士卒をして偽りて門役(看門の人)の中に雜えしめ、猝かに起きて[黄]家鼐の首を斬り以て徇(さししめす)す。蘇[州]の紳士 方に起兵を謀らんとし、已に[楊]文驄の軍の至ると爲すを知るや、大いに悦ぶ。然れども[楊]文驄 蘇州の守る能わざるを度り、庫金の二十萬を取りて軍を移して浙に入る……(『南疆逸史』卷五十六・列傳第五十二・姦佞・「楊文驄」条)。

楊文驄は蘇州に至り、南京が陥落し、清政権の豫王の派遣した安撫使の黄家鼐が蘇州に到着して、蘇州の「吏民」はそれを迎え入れて入城させた、聞いた。翌日、楊文驄は兵士を偽って門番の中に忍び込ませ、にわかに事を起こし、黄家鼐の首を斬ってみんなに指し示した。ちょうど蘇州の「紳士」が、軍事蜂起を考えていたところであったので、楊文驄の軍がやってきたと知り、たいへんよろこんだ。しかし、楊文驄は蘇州を支えることができないことを推し量り、金庫の二十萬を取って軍を移動させて浙江に行った、という。

蘇州の「紳士」が、軍事蜂起を考えていたところであったので、楊文驄の軍がやってきたと知り、たいへんよろこんだ、という記述がこれまで検討してきた史料と異なっている。

ここで言及される「方に起兵を謀らん(方謀起兵)」としていたというのは、六月二十二日条で検討するような事案であったのかもしれない。また、拙稿「蘇州における李延齡の伝説について」(『経済理論』第 376 号・2014 年 6 月刊)で検討した、閏六月十三日の暴徒の蘇州乱入も、

✓ 1) この個所について、『嘉定縣乙酉紀事』(痛史本)は、
 ……曾^{たま}たま前監軍道の楊文驄 兵五百を率いて郡城に入る。[黄]家鼐方に軍を西察院^{ねがら}に勞^{らう}わんとす。
 [楊]文驄 直ちに入り、[黄]家鼐及び従者數人を執え、盡く之を誅す。庫積(倉庫の物資)を發取して去る……(『嘉定縣乙酉紀事』(痛史本)・一葉)。
 とあり、『東塘日割』(荆駝逸史本)は、
 ……未だ幾ならずして、明・監軍道の楊文驄 兵五百を率いて郡城に入る。[黄]家鼐等數人を^{とら}え市に^{ころ}戮し、府庫の銀を發取し滿載にして去り、之^の所を知る莫し……(『東塘日割』(荆駝逸史本)・「乙酉五月初九日、南都破、弘光出亡」条・一葉)。
 となっており、少し文字が異なっている。

『南疆逸史』の撰者の溫睿臨の意識のなかにはあったのかもしれない。

ただし、『南疆逸史』は、康熙年間後期に書き終えられたとされるので、実際に順治二年の蘇州の空気を伝えるものではないと考えられる。もっとも、『吳城日記』も、『南疆逸史』で「大いに悦ぶ」という「蘇〔州〕の紳士の紳士」ではなく、一般の人々（「吏民」）の立場から、蘇州に起こった出来事を記録しているようであるが。

六月四日

楊文驄は、早朝に自分の軍勢を引き連れて蘇州を逃げ出す。午後に清政権の軍が到着し、一部の軍が楊文驄を追いかけて行く。

初四日黎明、〔楊文驄は〕葑門を出で舟に登り兵を率い遁れ去る。人心 瓦解す。凡そ各兵の近郊に屯扎（駐扎）する者は皆な散歸し、六門 閉じず。是の日、微雨あり。午門（午間：午後の間）北兵 驟かに至り、閘門より入る。人各々二馬あり、魚貫（連なって進む）陸續として行く。婁門より出で、轉じて葑門に往く。楊文驄を追わんと欲すればなり。追いて水濱に至る。楊君（楊文驄）之く所を知らず。其の隨從する兵舟 北兵の火器を以て幾隻を撃壊さるを被り、□窖 亦た一二を焼毀す。北兵の大營は社壇^①に扎え、主帥は白雲庵^②に駐む。〔清軍は〕諸々の郷紳を出し、與共に地方の事を議せんと欲し。隨處に懸示して慰諭（安心できるようにする）す（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）六月四日」条・二〇六頁）。

（四日の黎明に、楊文驄は葑門を出て舟に乗って兵士を率いて逃げ去ってしまった。人々の気持ちは、ばらばらに崩れ去った。各兵士で近郊に駐留していた者たちは、それぞれ勝手に帰ってしまい、蘇州のすべての城門は開かれたままであった。この日、小雨があった。午後に清朝の兵士がにわかに到着し、北西の閘門より入城した。ひとりが二匹の馬を率いていた。兵士たちは、連なり列を作って続いて行軍した。北東の婁門から城外に出て、右に折れて南東の葑門に進んだ。楊文驄を追跡するためである。水辺に至ったものの、楊文驄の行方は分からなかった。楊文驄が使用して持って行った兵船は清朝の軍の火器で数隻が破壊され、穴倉もひとつつつ焼かれてしまった。清朝は社壇に軍営をかまえ、主軍は白雲庵に駐留した。清軍は、郷紳を召し出し、ともに行政を相談したいと考え、隨所に布告して慰諭（安心できるようにする）した）

①社壇：社壇は、蘇州に二つあるが、ここでの社壇は、蘇州城の北西の閘門外のいまの留園の付近にあったものを指すと考えられる。

②白雲庵：社壇のそばにあった。光緒『蘇州府志』によると、「白雲禪院は閘門外に在り。宋・慶曆間に范文正公仲淹 奏して、天平山白雲庵に即して功德寺を改めて庵を此に移す。明・萬曆二十年、郡紳の徐元正 鼎新（新しくする）し、崇禎間に僧海定 再修す」（光緒『蘇州府志』卷第四十・寺觀二・吳縣・

「白雲禪院」条・二十五葉：乾隆『蘇州府志』にはこうした説明なし。

『蘇城記變』は、この日と翌日の身邊に起こった出来事をつぎのように伝える。

[六月] 初四日、十室に九は空し。是れより先、比隣は猶お四婦と老荊と伍を爲す有るがごとし。是の日、已に閨^{ママ}（閨：ひっそり）として一人も無し。余が夫婦は門を閉ざして命を俟つ^①のみ。日 將に午にならんとするに、馬蹄蹠^{ちようしやう}（ゆっくりと歩む）として北より南す。門隙より之を窺えば、狀貌（容貌）猙獰（凶惡）なりて衣裝怪異なるもの大約 每隊四五十騎なり。幸いにも其の志 楊[文聰]・朱[國臣]の輩を追うに在りて、未だ肆暴（暴力を振るう）するに遑あらざるなり。數隊 已に過ぎる後、一隊 行きて弊廬の前に至る。忽ち輓（おもがい）を扶（支える）して進まず。余 手足の措く^②無し。向に北兵 最も門扇（門）の拈（貼り付ける）する所の武士（蘇州の風習で五月中正面の間に掛ける鍾馗の画像のことを指すか）を惡むと聞く。民間 磨洗（こすって洗い落とす）し已に盡く。獨り余が家及び一の隣家は猶お在り。[そのため] 以爲らく或いは其の怒りに觸れ、將に關を斬りて以て入らんとす、と。湏^{ママ}之（須之：しばらくして）、竟に鞭を揚げて以て去る。禍を免ると雖も、然れども驚魂（驚きとりみだす）奪魂するなり。嗣後、復た過ぐること十餘隊、遂爾（そうして）寂寂（ひっそりする）たり。日 已に向暮（夕暮れ）たりて、人情^{はじ} 甫めて定まる。又た遙かに回祿（傳説中の火神。ここでは火災の意味）の煽るの虚（空）を見るに、復た畏懼を懷く。未だ幾ばくならずして、焰 息む。乃ち北兵 楊監軍（楊文聰）を追いて寶帶橋に至るも、[楊] 文聰 已に之^③く所を知らず。火を舉げて其の遺す所の舟を焚くのみ。寢るに未だ安席（安眠）せず。鷄 聲唱し、曉晨^おに興き老荊^{たずき}を携え、後村の一尼菴に至り之を避く。已に女郎（若い女性）數輩の先に在る有り。喘息（緊張したなかでのあわただしい休息）少々定まる。喧傳するに「北兵の三五（満政権の渾に徵發された下役）羣を爲し道を分かちて某巨室を掠奪し、搶刼（劫）すること洗うが如し。某家の姑媳 悉く淫汚を被る。某家の少婦 水に赴きて身殞す」と。忽ち村人 又た報ずるに、「兵 咫尺^{しせき}（すぐそば）に在り」と。驚惶（驚き慌てる）の際、三人 門に迫り韋駄像を見て儼然として相い顧みて敢えて入らず。午後、傳うる所は更に聞くに忍びず。凡て婦女^{あた}に値るは、衢巷田野を論ずる無く、即ち裸にして之を^{もてあそ}狎ぶ。且つ環にして之を鬪る。多頃刻（極めて短い時間）にして致斃する者多し。鎮撫・郡守（知府）禁を示すと雖も、聞く罔きが若きなり。北柵の陳醫生の家の妯娌^④（兄・弟の妻の合稱）二人は尙お少艾（若くてきれい）なり。[北兵の三五のことか] 二十餘人、後戸より入り、其の酒を煖め饌（食事）を治（作る）らんことを迫る有りて、恣意（ほしいまま）に飲啖淫樂す。余 一友と偕^{とも}に往き觀見するに、門に沿いて杯盤（酒肴）を陳列し、郡卒（蘇州の役所の下役たち）環坐（取り囲んで座る）す。二女は止だ下に短裊（したばかま）を穿き、其の中に糝^{まじ}る。或いは唇を與接す、或いは其の乳を弄ぶ、或いは酒を以て之と合盃（結婚の儀式）の狀を作し、相い與に撫掌（拍手）し掀髯（大笑いする）す。人 共に四圍して攢睨（取り

囲んでながめる）し、敢えて誰何（きびしく問い詰める）する莫し。彼（彼女たち：陳醫生の家の嫁二人）も亦た畧々顧忌（はばかり・遠慮する）する無し。良^{まこと}に驚嘆（驚き嘆く）す可し。回^{かえ}るに一曲を経るに、徑^{ただ}ちに二女の屍を見る。紗衣（薄着の衣装）碎裂（破れて裂ける）し渾身血汚す。詢うに乃ち一母一女の獲われ淫死する者なり。目睹し心傷す。其の他の傳聞を得る者は、以て枚舉し難し。眞に斯民（百姓^{ひやくせい}）の一大厄刼（災難）なり。是の日、主帥^⑤ 兵を社壇^{とど}に駐む。[もともと]屠城の意有るも、周子靜（周荃）の力めて之を解くに頼りて止む、と云う。夜 來り、余 獨り居りて舍を守る。蟲鼠の音聲を聞き、亦た夢中に驚惕し、人の排闥（門を押し開ける）して直ちに入りて刃もて將に頸に加えんとするが若き者なり（『蘇城紀變』不分卷・二葉～三葉・國學保存會印『國粹叢書』第三集・光緒三十二年（一九〇六）發行）。

①『中庸』第十四章・第四節に「上不怨天，下不尤人，故君子居易以俟命，小人行險以徼幸（上は天を怨みず，下は人を尤めず，故に君子は易に居て以て命を俟ち，小人は險を行いて以て幸を徼む）」。

②『論語』子路に「名不正，則言不順。言不順，則事不成。事不成，則禮樂不興。禮樂不興，則刑罰不中。刑罰不中，則民無所措手足（名 正しからざれば，則ち言 順わず。言 順わざれば，則ち事 成らず。事 成らざれば，則ち禮樂 興らず。禮樂 興らざれば，則ち刑罰 中らず。刑罰 中らざれば，則ち民手足の措く所無し）」。

③後村：後莊のことかと思われる。後莊は、蘇州城南東にある今の相門と葑門との間の外城河の東岸のあたり。

④北柵：北柵頭のことか。北柵頭は、蘇州城南東にある葑門の外城河の東岸あたり。後莊の南側。

⑤社壇：社壇は、蘇州に二つあるが、ここでいう社壇は、蘇州城の北西の閭門外のいまの留園の付近にあったものを指すと考えられる。

（六月四日、十のうち九つが空き家になってしまった。以前は、隣り近所の四人の婦人と私の家内とで一伍（五人の単位）となるようであったのが、この日には、すでにひっそりとなって一人もいなくなった。私たち夫婦は門を閉ざして、天命に任せるのみであった。正午になろうとした時、馬がゆっくりとした歩調で北から南に向かって行った。門の合間からこれを覗き見たところ、様子は凶悪で変わった衣装のものがだいたい四五十騎の隊列でいた。幸いなことに楊文驄・朱國臣などを追跡するのが目的であったので、乱暴狼藉するひまはなかったようであった。いくつかの隊列が通り過ぎて行ってから、一隊が私の家の前にやってきた。突然に馬具のおもがいを支えて進まなくなった。私は手も足も出ず途方に暮れてしまった。以前、北方の兵士は最も門口に貼り付けた武人（鍾馗のことか）の画を嫌っていると聞いていた。人々の間では、それをこすって洗い落としていたのであったが、ひとり我が家と一軒の隣家はまだそのままであった。そのために北兵の怒りにふれてしまい、門の闕を斬り壊して入ってくるのでは思った。しばらくして、鞭を挙げて去っていった。禍を免れたといっても、驚きとりみだし魂が奪い去られたようであった。その後、

また十数隊が通り過ぎ、そうしてひっそりとなった。すでに晩になって、気持ちは、はじめて落ち着いた。伝説の火神の回祿が煽った火災が起こっている空を見ると、また恐れをいだいた。しばらくして火災が収まった。北方からの軍勢は、楊監軍（楊文驄）を追跡して寶帶橋に至ったけれども、楊文驄はどこに行ったかわからなかった。そこで、遺棄された舟に火をつけただけであった。寝たけれども安眠できなかった。鶏が鳴き始め、朝早くに起きだし、家内を連れて後村（後莊）の尼寺に行って難を避けた。そこにはすでに若い女性が数人先にいた。緊張したなかでのあわただしい休息をとり、すこし落ち着いた。「北兵に徴発された下役たちがそれぞれ一群となって別々の道を通って某資産家を掠奪し、洗い流すようにすべてを強奪していった。某家の姑と嫁とはすべて乱暴された。某家の若妻は入水して亡くなった」などとひろく伝わった。するとすぐに村人が、「兵士がすぐそばにいます」と伝えてくれた。うろたえていたところ、[兵士] 三人は、門までやってきてその韋駄像を見て厳粛な様子となりお互いに見てあえて入ろうとしなかった。午後に伝わってきたのは、さらに聞くに忍びなかった。それは、すべて成人女性に値するものは、街や村を問わず、ひどく乱暴した。さらにサークル状に集めてもてあそんだ。少しの間に亡くなった者が多かった。鎮撫・郡守（知府）が禁令を告示しても、聞き入れないようであった。北柵（北柵頭）の陳医師の家の兄弟の妻二人は。まだ若くて美しかった。北兵に徴発された下役たち二十人余りが、裏門から入りこみ、酒をあたため食事を作るように迫り、ほしいままに飲み食いして狼藉した。私は一人の友人と一緒に行き見たところ、門に沿って酒と料理を並べ、郡卒（蘇州の役所の下役たち）は、取り囲んで座っていた。陳醫生の家の嫁二人は、下に短いしたばかまを着て、その中にまじっていた。いろいろに見ておられないようなことを行なっていた。人たちは、それをまわりから取り囲んでながめて、そうした行為をきびしく問い詰めることはなかった。陳醫生の家の嫁二人もまたはばかりのようなことはなかった。ほんとうに驚嘆（驚き嘆く）すべきである。帰りにひと曲がりしたところ、すぐに二人の女性の亡骸を見つけた。薄着の衣装は破れて裂け、全身血だらけであった。尋ねたところ、母と娘の捕らえられて亡くなったものであるという。それを見て心が痛んだ。それ以外の聞き及んだことは枚挙に暇がないほどであった。ほんとうに、人々にとっての一大災難である。この日、清の派遣軍の総帥が軍勢を社壇に駐屯させた。もともと蘇州城を屠るつもりであったが、周子靜（周荃）が懸命に申し開きを行なったことによって止まったということである。夜になって、私ひとりいて家を見守った。蟲や鼠の声を聞き、また夢の中で驚き畏れた。あたかも人が門を押し開いて入りこみ、刃を首に刃を充てるようなものであった）

『蘇城記變』の筆者は、六月四日・五日の悲惨な状態を伝えている。また、清軍の総司令官が、蘇州城を屠ろうとしたのを、周子靜（周荃）が懸命に申し開きをして思いとどませたという。この伝聞は、後に清の高宮の李延齡が蘇州城の屠殺を止めさせたという伝説になってゆく（詳

しくは拙稿「蘇州における李延齡の伝説について」（『経済理論』第376号）参照）。

さて、文秉『甲乙事案』（「六月、清兵入蘇州、監軍副使楊文驄逃、長洲諸生顧所受死之」条）によると、清政権の軍は、大運河沿いに南下し、蘇州城に近づく^とと軍を三つに分けて進み、蘇州城北西にある閶門外の白雲庵に軍勢を集結させたという。また、この月に蘇州の諸生の顧所受が殉節したという。

六月、清兵 蘇州に入る。監軍副使の楊文驄 逃[走]す。長洲の諸生の顧所受 之に死す。

清兵 蘇[州] に入るに、一は虎邱黃花涇よりし、一は楓橋より横塘に出で、一は高板橋より洞涇^{とど}に出る。大帥の貝勒 師を閶門外の白雲庵に駐め、士紳をして朝見せしむ。[士紳は] 皆な四拜の禮（莊重な拜禮）を行なう。遂に兵を統べて杭に入る。侍郎の李延齡と降將の土國寶に命じて蘇州に鎮せしむ。原任通判の徐樹藩に太倉知州事を授く。舉人の王節・李楷等 嘉定・武進等の縣の知縣を署（代理）す。顧所受とは、長洲の老儒なり。人「東吳先生」と稱す。變を聞き、詩を賦して云う「身是明朝老布衣、眼看世界不勝悲。從容死向宮牆地、免使忠魂棄濁渠（身は是れ明朝の老布衣、眼看する世界は悲しみに勝えず、從容と死せんとして宮牆の地に向かえば、忠魂をして濁渠に棄てしめらるるを免れん）」と。又た自ら几上に書いて云う「非自同於匹夫・匹婦之諒^①、實不忍爲被發左衽之人（自から匹夫・匹婦の諒に同じきに非ず、實に被發左衽の人と爲るに忍びざればなり）」と。遂に學宮に往きて自經せんとするに、學役の覺る所と爲り、乃ち水に赴きて死す（文秉『甲乙事案』卷下・「六月、清兵入蘇州、監軍副使楊文驄逃、長洲諸生顧所受死之」条）。

①「諒」・「被髮左衽」：『論語』憲問に「子貢曰、管仲非仁者與。桓公殺公子糾。不能死。又相之。子曰、管仲相桓公。霸諸侯。一匡天下。民到于今受其賜。微管仲。吾其被髮左衽矣。豈若匹夫匹婦之爲諒也。自經於溝瀆而莫之知也（子貢 曰く、「管仲は仁者に非ざるか。桓公 公子糾を殺す。死すること能わず。又た之に相たり」と。子 曰く。管仲 桓公を相けて諸侯に覇たらしめ、天下を一匡し、民 今に到るまで其の賜を受く。管仲 微かりせば。吾れ其れ髮を被り衽を左にせん。豈に匹夫匹婦の諒を爲すや、自から溝瀆に經れて之を知るもの莫きが若くならんや）」とあり、『論語』衛靈公に「子曰、君子貞而不諒（子曰く、君子は貞にして諒ならず）」とあり。その朱注は、「諒、則不擇是非而必於信（諒は、則ち是非を擇ばずして信ずるを必とす）」として、「諒」を是非を選ばずにこれに執着して信じようとだけするという意味とする。

清政権の軍は、大運河沿いに南下する。蘇州城に近づく^とと軍勢を三つに分け、一隊は上堤河に沿って虎丘を通り閶門に近づく。一隊は大運河沿いに少し南下し寒山寺から上堤河に沿って閶門に進む。別の隊は、さらに少し大運河沿いに南下し高板橋から東に折れて進んだ。大帥の貝勒は、軍をまとめて閶門外の白雲庵に駐屯した。そして、蘇州地域の指導者階層の人たち（士紳）を召し出した。召し出された人たちは、すべて莊重な拝礼を行なった。そうして、[大帥の貝勒は]、軍勢を率いて、杭州に行った。大帥の貝勒は、侍郎の李延齡と降將の土國寶に蘇州駐

屯を命じた。もとの通判の徐樹藩²⁾を太倉知州事に任命した。舉人の王節³⁾や李楷⁴⁾などを嘉定・武進など知縣に仮任命した。殉節した顧所受は、長洲の老儒である。「東吳先生」と言われていた。北京が陥落したことを聞き、「身是明朝老布衣，眼看世界不勝悲。從容死向宮牆地，免使忠魂棄濁渠（身は是れ明朝の老布衣，眼看する世界は悲しむに勝えず，從容と死せんとして宮牆の地に向かえば，忠魂をして濁渠に棄てらるるを免れん）」と詩を作り，机に「非自同於匹夫，匹婦之諒，實不忍爲被發左衽之人（自から匹夫・匹婦の諒に同じきに非ず，實に被發左衽の人と爲るに忍びざればなり）」と書き置した。そして，學宮に行き，自經しようとしたが，學宮の事務員に気づかれ，泮水（泮池）に飛び込んで亡くなった，という。

長洲の老儒の顧所受の自經は，以下で検討するように蘇州の地方志や清朝初期に書かれた『明季南略』や『明末忠烈紀實』など，様々な書物で取り上げられている。これは，顧苓（字は雲美。江蘇蘇州の人。明の諸生）が言うように，蘇州城の諸生で殉節したのは，顧所受（順治二年（一六四五）自裁）と許琰（崇禎十七年（一六四四）自裁）の二人だけであったことによるかもしれない。

顧苓 曰く，「兩都の變，吳門の生員を以て國に死する者は二人（許琰と顧所受），亦た節義の邦と謂う可きなり」と（屈大均（原名は紹隆，或いは邵龍，字は翁山，一字は冷君。廣東番禺の人。崇禎三年（一六三〇）～？。明季の諸生）『皇明四朝成仁錄』（卷十二・生員死義傳・「顧所受」条）所引）。

ところが，順治二年当時蘇州にいた『吳城日記』と『蘇城紀變』の作者たちは，このことに言及しない。『自靖錄考略』で，「士民の弔に赴く者は千人なり。許琰と〔ともに〕長洲の雙義と稱さる」とされたに於ては，冷淡であるように思える。特に『吳城日記』の作者にとっては，同じ諸生であったにもかかわらずである。さらに言えば，混乱していた蘇州城内で，千人もの人間が集まれば，記録するに値する事件であったと思われる。

なお，『明末忠烈紀實』・乾隆『長洲縣志』には，顧所受は順治二年五月二十八日に自裁したと記す。しかし，文秉の『甲乙事案』は，六月に掛けているので，この「六月四日」条で検討する。

さて，この顧所受は，三代にわたって進士となる先祖を持つ家の出身であった。

顧所受 字は性之，號は東吳，〔江蘇〕長洲の人なり。六世の祖の〔顧〕巽，〔顧〕巽の子の〔顧〕暉（暉），〔顧〕暉（暉）の子の〔顧〕餘慶，相繼ぎて永樂甲辰（永樂二十二年甲辰科（一四二四）三甲四十四名の進士）・正統丙辰（正統元年丙辰科（一四三六）三甲二十七名の進士）・成化壬辰（成化八年壬辰科（一四七二）二甲四十八名の進士）の進士に擧げらる。故に其の坊を表（表彰）わして「三辰」と曰う，云う……（『明季南略』卷之四・「蘇州顧所受投泮池」条）。

徐秉義（字は彦和，号は果亭。江蘇崑山の人。崇禎六年（一六三三）～康熙五十年（一七一）。康熙十二年癸丑科（一六七三）の探花〔一甲三名〕）の『明末忠烈紀實』には，つぎのよ

2) 徐樹藩について、嘉慶『江寧府志』には、

徐樹藩 常州人、官生（恩蔭によって監生（國子監に入学したもの）となったもの）たり（嘉慶新修『江寧府志』卷之二十・秩官表・「通判」条・二十九葉）。

とある。江蘇常州の人で、官生（恩蔭によって監生（國子監に入学したもの）となったもの）であり、明末には「江寧通判」であった。

福王弘光政権の時には、阮大鍼の推薦で、もとの「江寧通判」の地位に復帰した。

〔十月〕庚申（六日）、……又た原任の應天府通判の徐樹藩の官を復す。皆な侍郎の阮大鍼の薦す所なり。

〔阮〕大鍼 受事（職に就く）してより以來、凡て各員の察・處・降・補するに、賄足れば則ち用う。嘗て禮科都の沈胤培に語けて曰く、「國家 何ぞ財無きを患わん。即ち撫按の糾薦の一事の如きは、賄もて免ぬるに非ざれば、則ち賄もて求む。半ばを私橐（自分のふところ）に餉（おく）のみ。但だ銀若干を官に納めしむれば、應に糾すべき者は糾するを免れ、薦を欲する者は薦に予かる。推して之を廣むれば、公帑（國庫）充つ」と。其の謬妄 此の如し。……〔徐〕樹藩 以て銀二千を助して堡（とりで）を建つ、故に之を保つ（『南渡錄』卷之三・「〔十月〕庚申（六日）」条）。

清政権になると、すぐに理刑（刑法を処理する官員）となり、太倉州知州に代理任命される。

閏六月十一日、……本府の太尊の王（王鏊）先の六月十五日 方に束髮冠帶し、新任の理刑の徐樹藩と恭しく文廟を謁す。徐〔樹藩〕は即ち郡中の著姓にして、先に曾つて應天通判に官たる者なり。今、節推（理刑推官）に補され、隨いて大倉州の事を署す（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）閏六月十一日」条・二〇九頁）。

ただし、太倉沙溪の王家禎（字は予來。太倉沙溪の人。崇禎九年（一六三六）の副榜）の『研堂見聞雜錄』によると、殘明政権の荊本徹の軍が太倉に攻め込んでくると、すぐに逃げたす。

吾が婁太倉は、王受茲の事 露わるの後より、即ち司理の徐某公（徐樹藩）の來りて署篆（知州代理）たり。徐〔樹藩〕は即ち郡の人で、字は公宣なり。福王の時、蔭を以て京兆通判に調（配置転換）せらる。家は巨富なり。少年（若い時）佻達（輕薄放蕩）にして、倡優（役者）・六博（ゲーム遊び）を喜ぶ。本朝 用いて蘇州司理と爲す。太倉の官無きを以て即ち署篆（知州代理）を委ぬ。婁に至りて二日にして荊〔本徹〕の兵 至る。荊公本徹（荊本徹）、丹陽の人なり。甲戌の進士（崇禎七年甲戌科（一六三四）三甲十一名の進士）。舊と建昌司理と爲る。福王の時、水師を督し、京口に鎮たり。兵艘數千を有す。大兵 江を渡り、東海に遁れ入り、崇明の諸沙の間を盤桓（徘徊）す。潤・婁の東は人無く、虛に乗じて據らんと欲す。六月廿五日に於いて、兵千餘を統べて東門より入る。徐公（徐樹藩）風を聞きて北門より遁れ出で、放生庵に入る。小舟を覓め、速やかに去る。荊公（荊本徹）之を索むるを得ず。〔徐公（徐樹藩）を〕跡（追跡）して放生庵に至り、一（ひとり）の沙彌（出家したての僧侶）を斬る。是の夕べ、城中に宿す。大いに侵擾（侵入して混乱させる）する無し。明日、兵を引きて西門より出づ。忽ち一校の牌を持ち來りて、聲言（声をはりあげて言いふらす）するに「大兵數萬 已に下り、荊軍 掩面（こそこそと顔をかくして）して歸る。〔荊本徹の軍は〕東門より走り出で、民の貲（資産）を掠（奪い取る）して去る」と。徐（徐樹藩）復た來る……（『研堂見聞雜記』不分卷・六葉・「痛史」第五種所收本・辛亥（一九一一年）十月初版）。

また、「欽命總督刑部侍郎李公再造吳民碑」には、「太倉州知州の徐樹藩」とある。この碑文は、順治二年七月に建てられたので（『虎阜金石經眼錄』による：詳しくは拙稿「蘇州における李延齡の伝説について」（『經濟理論』第376号）注（6）参照）、順治二年七月の時点ではまだ、太倉州知州であったようだ。

以上からすると、徐樹藩、字は公宣で、蘇州常州の人で官生（恩蔭によって監生（國子監に入学したもの）となったもの）であった。資産家の家で生まれ、若い時には放埒な生活を送る。明末には、應天府通判となり、福王弘光政権でも阮大鍼に賄賂してその官位に留任される。福王弘光政権が崩壊すると、清政権に投誠して理刑推官となる。そして、順治二年六月十五日に蘇州知府の王鏊とともに文廟に拝謁した。太倉州知州に仮に任ぜられ、六月二十三日に着任す。二日後の二十五日、福王弘光政権の荊本徹の軍が太倉に入城すると、逃げ出す。翌日の二十六日、荊本徹の軍が出てゆくと、舞い戻る。なお、嘉慶『直隸太倉州志』（卷第

六・〔職官〕上・國朝知州・「李作楹」条・十九葉)によると、順治二年から順治五年まで李作楹(字は辛水。湖廣孝感の人。明・崇禎三年の舉人)が太倉州知州に任ぜられているので、徐樹藩はわずかな期間だけ太倉州知州代理を務めただけのようである。

- 3) 王節は、吳縣の人で「崇禎十二年己卯科解元湯斯祐宣城人」(乾隆『蘇州府志』卷三十八・選舉三・六十二葉)の舉人である。天啓六年(一六二六)に周順昌が魏忠賢たちの宦官派に逮捕されることに端を発する開讀の變があり、王節は、楊廷樞・文震亨・徐汧・袁徵たちと対策を講じようとして、学籍を剝奪され禁錮刑となった。東林党と敵対した魏忠賢らが失権して、その派閥に属した顧秉謙が故郷の江蘇崑山に帰郷すると、厳しく追及し、崑山から追放した。崇禎十二年(一六三九)の郷試で舉人となる。清政権下で、湖南桃源教諭に任命された、という

乾隆『蘇州府志』は、王節について、つぎのように伝える。

王節、字は貞明。諸生と爲り、氣節を尙とぶ。[天啓六年(一六二六)]周順昌(江蘇吳縣の人。萬曆四十一年癸丑科(一六一三)三甲二十名の進士)[反魏忠賢派への弾圧に連座して]逮[捕]さる。吳民環聚(集まる)して呼冤(冤罪無実の罪であると訴える)す。[王]節 諸人と偕に巡撫の毛一鷺(浙江遂安の人。萬曆三十二年甲辰科(一六〇四)三甲十八名の進士)に民情を以て上聞せんことを請う。[毛]一鷺 聽さず。[王]節 遂に直ちに其の奄姦(奸)に黨するの狀を斥(非難)す。除名に坐して禁錮さる。奄敗れ、復還するを得。顧秉謙(萬曆二十三年乙未科(一五九五)二甲十名の進士)奄黨を以て竄歸(こっそりと帰郷する)す。吳の人士 之を逐(追放)うこと急(はげしい)なり。巡撫の曹文衡(河南唐縣の人。萬曆四十四年丙辰科(一六一六)三甲一百十六名の進士：崇禎元年七月十七日～崇禎四年四月まで應天巡撫)諸生を責めて曰く、「若等 宜しく戸を閉して讀書すべし。何ぞ彰瘡の事に與からんや」と。[王]節 曰く、袞(袞)鉞(褒貶)する者は、朝廷の權なり、是非する者は庶人の議なり。[王]節等 書を読みて杞(唐の姦臣の盧杞)・檜(南宋の姦臣の秦檜)の國を誤るに至り、刃を其の腹に刺さざるを恨む。焉ぞ能く俯首(低頭)して生(先生の略。讀書人の通稱)と杞・檜と里閭(郷里)を同じくせんや」と。卒に[顧]秉謙を逐い去る。後、崇禎己卯(崇禎十二年：一六三九年)の郷試に舉げられ、順治中に[湖南]桃源教諭に官たり舊府志新縣志合纂(乾隆『蘇州府志』卷第五十四・人物八吳縣・本朝・「王節」条・十七葉～十八葉：同治『蘇州府志』卷第八十二・人物九・吳縣・國朝・「王節」条も同じ)。

①「書經」畢命に「旌別淑慝、表厥宅里、彰善癉惡、樹之風聲(淑慝を旌別し、厥の宅里を表わし、善を彰わし惡を癉ましめ、之が風聲を樹てよ)：民の善いものと悪いものとを見分け、善人の住んでいるところをあきらかにし、善人を表彰し、悪人を悩ませ、善行についての噂と名声を立ててやる」。

②湖南桃源縣教諭：乾隆『桃源縣志』卷之七・秩官志・教諭・皇朝・二十五葉に、「朱允治」の次に記されている。江蘇常熟の朱允治は、順治八年から順治十六年まで教諭であったので(順治十六年に陝西紫陽縣知縣に転任：道光『紫陽縣志』卷四・職官志・知縣・四葉による)、王節の教諭就任は、順治十六年からと考えられる。何年まで在任したかは、断定できない。

王節、字は貞明、諸生となって、氣節を尊んだ。天啓六年(一六二六)に周順昌が宦官派に逮捕されることに端を発する開讀の變があり、蘇州の人々は集まって無実の罪であると訴えた。王節は、皆と一緒になるとともに、人々の気持ちを奏上したいと巡撫の毛一鷺に願い出た。巡撫の毛一鷺はそれを認めなかった。そこで、王節はどうとう魏忠賢の宦官派に連なっているという訴えをおこした。そのため、生員の資格を奪われて(退学処分)、禁錮刑とされた。魏忠賢の宦官派が失脚して、もとにもどることができた。顧秉謙は魏忠賢の宦官派であったことから、こっそりと帰郷してきた。蘇州の読書人たちは、顧秉謙をはげしく追放しようとした。應天巡撫の曹文衡(崇禎元年七月十七日～崇禎四年四月在任)は、「諸君たちは、門を閉じて学問すべきである。どうして善悪をはっきりさせることにかかわるのか」と諸生たちを批判した。すると、王節は、「褒貶を行なうのは、朝廷の權利です。いいか悪いかとするのは、庶民の議論によります。[私、王]節ほどは、書物を読んで唐の姦臣の盧杞・南宋の姦臣の秦檜が國を誤り導いたことにいたり、刃をその腹に刺さぬことを悔やんでいます。どうしてよく頭を下げて私たち読書人が盧杞や秦檜[のような輩]と里閭(郷里)を同じくしようとするのでしょうか」と言った。そして、とうとう顧秉謙をその故郷から追い出した。後、

うに記している。

顧所受、字は性之、蘇州長洲の人なり。幼きより穎異（人並以上に聡明）にして、邑令の江盈科（湖廣桃源人。萬曆二十年壬辰科（一五九二）三甲六十四名の進士：同治『蘇州府志』（卷第五十三・職官二歴代縣令・長洲縣・明）によれば、萬曆二十年八月から萬曆二十六年十一月まで在任）の賞する所と爲る。十一歳にして諸生に補せらる。管志道（字は登之、号は東溟。江蘇太倉州の人。隆慶五年辛未科（一五七一）の二甲四十四名の進士）に従いて講學し、交遊を善くして盛名有り。然れども館穀（塾師としての報酬）より外は、人に取る所無し。人も亦た此れを以て之を敬す。〔甲申の變の時〕、同邑の許琰^{きょえん}死す。之が爲に傳を作り、身を以て〔許〕琰に従わざるを恨む。其の後、南京 守らず。江東 風を望みて瓦解す。城守を議する者有れば、衆 輒ち其の室を毀つ。〔顧〕所受 方に其の子に講學して曰く、「此れ吾の之を管東溟先生に得る者なり。今日、人心 此の如きは、皆な學ばざるに縁る」と。乃ち菴堂（授業放棄）の文を作り、文廟を辭す。且つ曰く、「我の死するは

崇禎十二年（一六三九）の郷試で舉人となる。清の順治年間に湖南桃源縣の教諭になった、という。

- 4) 蘇州出身の李楷（字は仲木、江蘇長洲の人）は、「崇禎十五年壬午科解元盧象觀宜興人」（乾隆『蘇州府志』卷三十八・選舉三・六十三葉）の舉人である。清朝になって工部員外になっている。

『吳城日記』の「乙酉（順治二年）七月十六日」条には、

〔七月〕十六日、〔蘇州城内北西の閭門近くの〕李宦宅を抄（掠奪）る。李氏父子三人、父は李吳滋（萬曆四十七年己未科（一六一九）三甲五十二名の進士）、原任湖廣按察司副（湖廣按察司副司）、長子は李模（天啓五年乙丑科（一六二五）三甲四十九名の進士）、監察御史、皆な甲科、次子は李楷、壬午の郷科なり。亂を避けて龍墩に寓居す。地は崑山の界に近し・・・（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）七月十六日」条・二一五頁）。

〔蘇州城内北西の閭門近くの〕李氏宅が襲撃された。李氏父子三人は、父親の李吳滋（萬曆四十七年己未科（一六一九）三甲五十二名の進士）が、もともと湖廣按察司副司であり、長子の李模（天啓五年乙丑科（一六二五）三甲四十九名の進士）が、監察御史で。二人とも皆な進士である。次子は李楷で、崇禎十五年壬午科の舉人であった。混亂を避けて龍墩に居た。龍墩は、崑山縣との県境に近い場所である）とあり、進士の李吳滋の次子で、兄は進士の李模であり、この時期には崑山縣の県境に近い龍墩に避難していたという。

また、『吳城日記』の「八月十七日」条に、

八月十七日・・・李宦吳滋及び次子の孝廉の李楷 已に頭を剃りて歸順し、土（土國寶）・吳（吳勝兆：蘇松提督）の二公に進謁す。獨り侍御の李模 未だ回らず、抱病（病氣である）と托言（言い訳）す。未だ幾ばくならずして亦た入城して投見す。後、旨下り、其の原官もて起用するを許す（『吳城日記』卷中・「乙酉（順治二年）八月十七日」条・二二〇頁）。

（李吳滋と次子の孝廉の李楷は、すでに辮髪にして土國寶と吳勝兆の二人に拝謁した。長男で御史の李模は、まだ蘇州城に戻ってきていなかった。そこで、病氣であると言い訳した。しばらくして戻ってきて拝謁した。後に、旨が下され以前の官職のままで復職することが許された）

とある。八月十七日に帰順したと記しているので、文秉が『甲乙事案』で「〔六月に〕舉人の王節や李楷などを嘉定・武進など知縣に仮任命した」と伝える所と異なっている。すると、どちらかが誤っているのかという、そうでもなさそうである。実は、この時期、もうひとりの「舉人の李楷」がいた。この「舉人の李楷」は、陝西朝邑の人で、順治二年に江蘇寶應縣知縣に任ぜられている。文秉の「舉人の李楷」が、江蘇寶應縣知縣の「舉人の李楷」を指しているとすれば、つじつまが合いそうである。

なお、李吳滋親子については、「六月五日」条で検討する。

許琰と同じからず。[許]琰の死するは、先帝の既往（亡くなる）を痛めばなり。我の死するは、大義の將來に存せんとすればなり」と。乙酉五月二十八日、泮水に赴きて死す（徐秉義『明末忠烈紀實』卷十八・「顧所受」条）。

顧所受、字は性之、蘇州長洲の人である。幼いときから人並以上に聡明であり、長洲縣知縣の江盈科に認められた。十一歳で秀才となった。管志道に従って講學を行ない、交際を善くしてよく知られた。しかし、塾の教師としての束脩以外は、人から求めなかった（収入としなかった）。人々はまたこうしたことから尊敬した。[甲申の變の時]、蘇州の許琰が殉節した。そこで、許琰のために伝記を書き、許琰の殉節に従えなかったことを悔やんだ。その後、南京の福王政權が崩壊し、江南地域は情勢を見て瓦解していった。蘇州城を守って明に忠節を尽くそうと提案するものがいれば、皆はすぐにその家を壊した。顧所受は、自分の子供に講義して、「これは私が管東溟先生から教えていただいたことである。いま人たちの心情はこのようなものになった。それはすべて学問しなかったためである」と言う。そうして、学業の放棄宣言を書いて、文廟を辞去した。その上、「私の死ぬのは許琰と同じではない。許琰の死んだのは、先帝が亡くなったことを悼んだからである。私が死ぬのは、大義を將來に残そうとするためである」と言った。乙酉五月二十八日に文廟前の泮水に飛び込んで殉節した、という。

また、乾隆『長洲縣志』では、つぎのようにいう。

顧所受、字は性之。幼きより穎異（人並以上に聡明）にして、邑令の江盈科の賞する所と爲る。年十一にして諸生に補せらる。管志道に従いて講學し、交遊を喜びて盛名有り。然れども性 嚴重にして禮義を以て自ら守る。學ぶ者 之を憚りて稱して「東湖先生」と爲す。甲申の變、許琰の死するを聞き、哭して曰く、「吾 乃ち君と同じく死する能わず、君に愧ずること多し」と。之が爲に傳を作る。南京 守らず。郡縣 風を望みて瓦解す。[顧]所受 嘆じて曰く、「今日、人心 此の如し。皆な學ばざるに縁る」と。乃ち菴堂（授業放棄）の文を作り、文廟を辭す。五月二十八日、泮水に赴きて死す（乾隆『長洲縣志』卷之二十四・人物三・「顧所受」条・六十五葉）。

顧所受、字は性之である。幼いときから人並以上に聡明であり、長洲縣知縣の江盈科に称賛された。十一歳で秀才となった。管志道に従って講學を行ない、喜んで交流してよく知られた。しかし、性格は厳格で礼儀をしっかり守っていた。従学する者たちは、憚って「東湖先生」と言った。甲申の變の時、許琰が殉節したのを聞き、大声で泣く禮を行なって「私（顧所受）は、君（許琰）と時を同じく殉節することができなかった。君（許琰）に対してたいそう恥ずかしく思う」と言った。そして、許琰のために伝記を書いた。南京の福王弘光政權が崩壊し、各地域も情勢を見て瓦解していった。顧所受は、それを嘆いて、「いま人たちの心情はこのようなものになった。それはすべて学問しなかったためである」と言う。そうして、学業放棄宣言を書いて、文廟を辞去した。五月二十八日に文廟前の泮水に飛び込んで殉節した、という。

高承埏（字は愚公、一字は澤外。浙江秀水の人。崇禎十三年庚辰科（一六四〇）三甲六十八

名の進士)の『自靖錄考略』では、つぎのようにいう。

長洲縣學の生員の顧瑤，原名は所受，字は性之，號は東吳。乙酉五月，國變を聞き，知縣の李實に謁し，死を以て自ら誓う。色を正して危坐（正座）して，酒を索めて，徐むろに飲み，詩を賦して云う「身是明朝老布衣，眼看世事日皆非。從容死向宮牆地，免使忠魂無處依（身は是れ明朝の老布衣，眼看する世事は日々皆な非なり。從容と死せんとして宮牆の地に向かえば，忠魂をして處の依る無からしむを免れん)」。又た自から几に書して云う「非自同於匹夫・匹婦之諒^①，實不忍爲被發左衽之人（自から匹夫・匹婦の諒に同じきに非ず，實に被發左衽の人と爲るに忍びざればなり)」。是の月（五月）二十七日，其の子の〔顧〕善に謂いて曰く，「吾 老諸生を以て文廟に出入すること五十餘年。時事 此に至り，禮器を草莽（草野）に委ねんことを恐る。將に往きて焉を觀ん」と。遂に其の孫の〔顧〕珩^{こう}と俱に往きて儒の衣巾を^き服て肅謁（恭しく謁見する）し，捲堂（授業放棄）の文を作り以て至聖先師（孔子の諡號。明の世宗の嘉靖九年に定められる）を辭す。且つ拜し且つ泣き，廟門を出で，孫に先に歸るを命じ，乃ち泮池に潛投して死す。屍は植立（直立）し仆れず。士民の弔に赴く者は千人なり。許琰^{えん}と〔ともに〕長洲の雙義と稱さる（咸豐八年（一八五八）嘉興竹里王氏槐花吟館刊本『自靖錄考略』卷五・江南殉難下・蘇州府・「顧瑤」条・四葉）。

①「諒」・「被髮左衽」：『論語』憲問に「子貢曰，管仲非仁者與。桓公殺公子糾。不能死。又相之。子曰，管仲相桓公。霸諸侯。一匡天下。民到于今受其賜。微管仲。吾其被髮左衽矣。豈若匹夫匹婦之為諒也。自經於溝瀆而莫之知也（子貢 曰く，「管仲は仁者に非ざるか。桓公 公子糾を殺す。死すること能わず。又た之に相たり」と。子 曰く。管仲 桓公を相けて諸侯に覇たらしめ，天下を一匡し，民 今に到るまで其の賜を受く。管仲 微かりせば。吾れ其れ髮を被り衽を左にせん。豈に匹夫匹婦の諒を爲すや，自から溝瀆に經れて之を知るもの莫きが若くならんや）」とあり，『論語』衛靈公に「子曰，君子貞而不諒（子曰く，君子は貞にして諒ならず）」とあり。その朱注は，「諒，則不擇是非而必於信（諒は，則ち是非を擇ばずして信ずるを必とす）」として，「諒」を是非を選ばずにこれに執着して信じようとするという意味とする。

長洲縣學の生員の顧瑤，原名は所受，字は性之，號は東吳は，乙酉五月に福王弘光政權の崩壊を聞き，知縣の李實に拝謁して，死をもって誓いを立てた。厳肅な態度で正座し，酒を求めて，ゆっくりと飲み，「身是明朝老布衣，眼看世事日皆非。從容死向宮牆地，免使忠魂無處依（身は是れ明朝の老布衣，眼看する世事は日々皆な非なり，從容と死せんとして宮牆の地に向かえば，忠魂の處の依る無からしむを免れん)」という詩を賦した。また，みずから机に「非自同於匹夫・匹婦之諒，實不忍爲被發左衽之人（自から匹夫・匹婦の諒に同じきに非ず，實に被發左衽の人と爲るに忍びざればなり)」と書いた。この五月二十七日に子の顧善に向かって「私は年寄りの秀才で文廟に出入りすること五十年あまりになる。世情がこのようになって，孔子をお祭りする神具が草野に打ち捨てられることが心配だ。文廟に行って現状を見てみたい」という。

とうとう、孫の顧珩^{こう}とともに學宮（文廟に隣接する）に行き、儒式の衣巾を着て、うやうやしく拝謁し、学業放棄宣言を書いて、至聖先師（孔子）のもとから辞去した。拝しては泣き、文廟の門を出て、孫の顧珩^{こう}に先に帰るように命じた。そして、文廟前の泮池に飛び込んで亡くなった。亡骸は、直立したままで倒れなかった。士民たちの弔問に訪れたのは千人もいた。顧所受は、許琰^{えん}とともに蘇州府長洲縣の二人の義人と称された、という。

この顧所受とともに「義人」と称された許琰^{きょえん}については、『明季北略』に詳しく記される。ここでは、つぎのように伝える。

許琰^{きょえん}、字は玉重、蘇州吳縣の人なり。弱冠にして邑の諸生に補せらる。年十七にして臂^{うで}を剋^{えぐ}りて母張氏の疾を療^{いや}（治療）す。母と内戚（近い親戚）の某と割襟（襟を切り取って婚姻の約束をする）して聘（結納）を爲す。後、其の家 中落（途中から振るわなくなる）すれば、富家の女を以て公（許琰）に妻とせんと欲する者有り。時に公（許琰）の母 已に亡くなる。公（許琰）母の地下（あの世）に寒盟（約束に背く）させんとするを欲せず。卒に原姻に就く。生平 磊落不羈（大らかで自由にふるまう）、多くの怪しむ可きを少く。知己に對して飲み、酒酣なれば則ち狂歌（感情に任せて歌い）清嘯（響き渡るように鳴く）す。毎に「士 窮まりて節を見わす。苟^{あら}し其の時に値れば、豈に死を怕れて錯過（機会を逃がす）す可きや」と云う。甲申（崇禎十七年）四月、京師の變の〔知らせが〕至る。公（許琰）素より郷居す。之を聞き、驚き且つ疑い、踉蹌（慌ただしく）として入城し、弟の〔許〕璜^{こう}の家に至り、之を問うに、果して信なり。〔許琰は〕、乃ち天を仰ぎて大いに働き、賊と俱に生きずと誓う。自から念うに、力 敵^{みづ}を殲^{ほろ}ぼし難きも、必ず卿大夫の同心戮力（心をひとつにして協力する）を得んと。家を毀ち士を募^{こぼ}り義旗を北向に樹つ。因りて遍^つく羣公の門を叩きて之を告（求める）むるも、應ずる者有る莫し。始（只）だ徬徨（徘徊）歔歔（嘆息）し、先帝に九原（黃泉）に従いて、厲鬼（惡鬼）と爲りて賊を殺さんと誓う。五月午日、友人の家を過（訪問）するに、几に葵・榴（立葵・石榴^{たちあおい ざくろ}）を供（設置）するを見、愀然（憂える）として樂しまず。復た蒲酒（菖蒲酒）を出して相い勧む。公（許琰）怒り、杯を地に擲ちて、厲聲（高聲）に曰く、「今、何の時なるや。我らが輩は、聖賢の書を讀み、大義を明らかにす。旦夕に靦顏（慙愧）し、已に安んずる所に非ず。猶お飲食燕樂（宴飲して楽しむ）せんと欲すること平日の如きや」と。衣を拂いて竟に出ず。時に于いて巨室 相い率いて、妻子^{ひっさ}を挈^ひげ、輜重（持ち出した荷物）^{たづさ}を攜えて、湖山の間に竄避（逃匿）す。公（許琰）是の日 其の家を歴走し之を罵る。初九日、諸生 明倫堂に聚まり哭せんとす。薦^{ママ}（緇）紳孝廉^{ママ}或いは至り、或いは否^{こぼ}む、或いは縗素（喪服を着る）し、或いは常服す。甚だしきは張蓋（蓋を打ち開く）者有るに至る。衆 羣^{むら}がり誅^せめ且つ^{のし}詈^{のし}る。公（許琰）衰杖（居喪用の葛麻の布帯と杖）もて躡^{ママ}（躡）踊（胸を叩いて舞う）哭泣し哀^{かなし}みを盡くす^②。十一日、諸生 猶お哭臨（帝の喪で大勢の人が悲しみ泣く）す。御史某（李模：『啓禎記聞』による）來り文廟に謁するに、鼓樂（樂隊） 導從（先導）し、吉服

（祭祀を行なう時の礼服）にして入る。公（許琰）望見し、大いに駭^{おどろ}き、諸々の習禮（童生の禮を学ぶ）する者を率いて、趨^{おもむ}き前^{すす}みて、其の袍帶（宮員の制服）を褌（はぎとる）し、責むるに大義を以てす。御史（李模）惶悚（恐縮）として謝罪し去る。南都 是の月の初三日を以て「福王由崧が」監國の位に即き、使を遣りて天下に布告す。顧だ三月十九に先帝（崇禎帝）賓天してより、五月十二^{ママ}に至るまで、已に五旬（五十日）を踰^{こゆ}るも、朝廷 尚お未だ喪を發せず。公（許琰）嘆^{なげ}きて曰く、「吾（許琰）本より草莽の臣なるも、既に諸生と私に學宮に哭し、心 已に盡く。過^{すみやか}に死す可きなり^④」と。乃ち詩を題して曰く、「正想捐軀報聖君、豈期靈日墮妖氛、忠魂誓向天門哭、立乞神兵掃賊羣（正に軀を捐てて聖君に報ぜんと思う、豈に靈の日々妖氛（不祥の雲氣）を墮^{こぼ}つを期せんや、忠魂 天門（天宮の門）に向かいて哭せんことを誓い、立ちどころに神兵の賊羣^{はら}を掃うを乞う）」と。夜に至りて自縊す。家人 力めて救い、死せざるを得。旦（明け方）に及び密かに福濟觀の眞武廟の暗室（人に見つからない場所）に往き投縊す。羽士（道士）の陸某 屋中に聲有るを聞き、亟かに出だして之を解く。其の里氏を問うに對えず。固より之を留むるは不可なれば、送り還さんと欲す。又た力めて之を卻く。獨歩して閭關を出で、河に臨み嘆^{なげ}きて謂う、「城市の濁流 吾が軀を投げるに足らず。且つ人多く、必ず阻ばまる」と。遂に折れて南して、胥門に至る。河の廣く流れの深さを見て、曰く、「此れ胥江なり。吾（許琰）其れ命を此に畢え、伍相國（伍子胥）の忠魂と上下の怒濤（逆巻く波濤）たらんや」と。遂に躍りて入る。適々潞藩^{ママ⑥} 舟を江干（河岸）に泊し、[許琰が飛び込むのを] 遥かに望見し、人を遣りて馳せ救う。復た死せず。[潞] 王 公（許琰）を召し、故を問う。時に公（許琰）遍身に「崇禎聖上」の四字を寫く。宛轉（婉曲）として哀號（号泣）し、[潞] 王に告ぐるに情（心情）を以てす。且つ言う「君仇は報ぜざる可からず、京師は復せざる可からず、逆寇は誅せざる可からず、臣子は死せざる可からず。吾（許琰）の此れを爲すは、生きるを惡むに非ざるなり。特^{ただ}に以て今の其の祿を食みて其の難に死する能わざる者を愧じるなり」と。[潞] 王 大いに之を義とす。道旁の觀る者は堵^{かき}の如し。適に友の丁鉞武^{まさ} 至り、強いて掖（支える）して歸る。家人 其の事を知り、咸な固く之を守る。しかし [許琰^{きよ}は]、伺間（時期を伺い）して死せんと欲するも得ず。益々怒ること甚だし。遂に晝夜號叫して絶粒（絶食）す。之に食するを勸めるも、堅く受けず。但だ杯酒を飲む。曰く、「聊^{いささ}か以て吾が礪塊（胸中の鬱屈した気持ち）に澆^{そそ}がんとするなり」と。五月十九日、語ぐるに哀詔（前皇帝の喪を知らせる布告）の至るを以てすれば、就ち庭中に北面し天に向叩（叩頭）し、哭して失聲。遂に飲（飲酒）を絶ち并せて復た人間の事及び身後の計を言わず。慰解（安慰）する者有りて曰く、「公（許琰）何ぞ自から苦しまん」と。公（許琰）張目（怒りで目を大きく見開く）して曰く、「聖天子 此の如く慘逝す。吾（許琰）何ぞ忍びて下咽（飲み下す）せん」と。廿八日、餒^うえること甚だしく嘔（嘔吐）を作す。一絶を口授して「半生磨礪竟成空、國破君亡值眼中、一個書生難殺賊、願爲厲鬼効微忠（半生の磨礪

(練磨) 竟に空^{ひな}しと成る、國破れ君亡ぶは値^{ただ}(只) 眼中にあり、一個の書生 賊を殺し難し、願わくは厲鬼と爲りて微忠^{いた}を効さん)」と云う。六月朔、胃枯れ嘔盡き、之に繼ぐに血を以てす。親知(親戚朋友) 淡飲を以て勸進(勸める)す。〔許琰^{きょえん}は〕怒りて大いに呼びて、曰く「汝等 吾が倫生(いたずらに生きながらえる)するを欲するや」と。竟に唇膚を嚼爛さす。〔六月〕初二日、血 又た盡く。喉 腫れること甚だし。舌を吐くこと寸餘。初三日申時(午後四時)、空に向かいて三たび先皇帝と呼び、嘆目浩歎(長嘆)して卒す。時に年五十有一なり。同人の邱民瞻^⑧の輩 之が爲に棺殮し、私に諡して「潛忠先生」と曰う。一時の會弔(弔問に集まる)する者幾數千人なり。著書六卷は、丁鉞武^⑩に授けらる。南京 公に贈るに翰林院五經博士を以てし、湯文瓊^⑩と並びに旌忠祠に祀らしむ(『明季北略』卷之二十一下)。

①『左傳』莊公三十年に「鬬穀於菟爲令尹，自毀其家，以紓楚國之難(鬬穀於菟 令尹と爲りて、自から其の家を毀ちて、以て楚國の難を紓くす)：鬬穀於菟は令尹となつて、自分の財産を提出して、楚の國難をゆるくした(令尹が地位や権力が強くなりすぎるのをみずから抑制した)」とあり、杜預注に「毀は、減なり。紓は、緩なり」とある。

②『禮記』問喪に「故哭泣辟踊，盡哀而止矣(故に哭泣し辟踊し、哀みを盡くして止む)」。

③『孟子』萬章下に「孟子曰、在國曰市井之臣、在野曰草莽之臣、皆謂庶人(孟子 曰く「國に在るを市井の臣と曰い、野に在るを草莽の臣と曰う。〔しかし、それらは仕えていないので〕、皆な庶人と謂う…」)」。]

④『詩經』鄘風・相鼠に「人而無禮，胡不遄死(人にして禮無ければ、胡ぞ遄に死せざらんや)」とあり。その毛傳に「遄は、速やかなり」とする。

⑤福濟觀は、蘇州城北西の閭門近くの城内の阜橋の東にあった。俗に「神仙廟」といったという。

⑥潞藩^マ：拙稿『明末・衛輝府における潞王父子について』(『經濟理論』第393号)参照。

⑦丁鉞武：いまのところよくわからない。

⑧邱民瞻：同治『蘇州府志』によると、「邱民瞻、字は天民。諸生なり。少くして文震孟・朱陸宣の門に遊ぶ。持身(修身)甚だ嚴にして、内行(平日家居的操行)純備(純備：純正完備)し、倫誼(人倫大義)に篤し。同時(当時の人たち)の推す所と爲る。讀書を好み、尤も史事を諳^{そらん}ず。國變の後、野服(平民服装)して城市に入らず。居ること五年にして、病み卒す」(同治『蘇州府志』卷第八十二・人物九・吳縣・國朝・邱民瞻)条)。

⑨『明季南略』に「〔崇禎十七年八月〕二十三戌寅、進士の王曰兪 論もて諸生の許琰を褒めんことを請う。〔許〕琰は長洲の人なり」(『明季南略』卷之二・八月甲乙總略)とある。そして、「〔崇禎十七年〕九月初三日戌子……又た死節の諸生の許琰に官翰林院五經博士を贈り、忠臣廟中に從祀す」(『明季南略』卷之二・北京殉難諸臣諡)条)。

⑩湯文瓊：張岱(字は宗子、又の字は石公、号は陶庵・蝶庵居士。浙江紹興府山陰縣の人。明・萬曆二十五年(一五九七)八月二十五日～清・康熙二十八年(一六八九)?)の『石匱書後集』によれば、「湯文瓊、北直〔隸〕の人。京城 陷ち、自から縊死す。衣帶の中に、一紙を得るに云う「位は文丞相(南宋末

の文天祥）の位に非ざるも、心は文丞相の心を存す」と。中書舎人を贈らる」（『石匱書後集』卷第五十七・義人列傳・「湯文瓊」条）。

許琰^{きょえん}、字は玉重、蘇州呉縣の人である。二十歳で呉縣の諸生となった。十七の時、自分の臂^{うで}の肉を剝^{えぐ}りだして、母親の張氏の病気の治療した。母親と近しい親戚が割襟（襟を切り取って婚姻の約束する）して結納した。後にその家は振るわなくなっていたので、資産家で娘を公（許琰）に嫁がせようと願ったものがいた。その時には、公（許琰）の母親はすでに亡くなっていた。しかし、公（許琰）は、母親にあの世で約束に背くようなことはさせたくないと望んだ。そして、とうとうもとの婚姻の約束どおりにした。つねづね大らかで自由にふるまい、疑わしいことも大目にみた。友人と飲み、気分がよくなると、感情に任せて歌い響き渡るように鳴いた。つねに、「士というものは窮まった時に気節を表わす。もしもその時になれば、どうして死を恐れて機会を逃がすことができようか」といった。甲申（崇禎十七年）四月に都で陥落したという知らせが届いた。公（許琰）は、もともと故郷の蘇州の田舎に居たので、これを聞き、驚き疑い、急いで蘇州城に入り、弟の許璜^{きやう}の家に行き、問いただすと、やはり本当であった。許琰^{きょえん}は、天を仰いで大いに嘆き、流賊と生きている時間を共有しないと誓った。みずから、自分の力では敵を滅ぼすことは困難であるが、卿大夫の人たちの心をひとつにして力をつくそうと考えた。そして家の資産を投げ出して人々を集め、義旗を北に向けて立てた。そうして、ひろく有力者たちの家を訪ねてともに運動することを求めたが、応じたものはいなかった。そのために、ただ徘徊し嘆息して、先帝（崇禎帝）に黄泉に従って、悪鬼となって流賊を滅ぼすと誓うだけであった。五月五日、友人の家を訪問すると、蘇州の端午の風習どおりに机に葵・榴^{たちあおい ざくろ}（立葵と石榴）が花瓶に挿して置かれているのを見て、憂えて楽しまなかった。さらに、菖蒲酒を出してもてなしたところ、公（許琰）は怒り、酒杯を地面に投げつけて、声高に、「今はどういう時なのだろうか。我々のような者は、聖賢の書物を読み、大義をはっきりさせるのである。今は、朝から夕べまで慙愧に堪えないし、すでに安閑としているところではない。なのに普段の通りに会食して楽しもうと思うのだろうか」という。衣を払ってとうとう出て行った。この時、資産家はお互いに一緒になって、妻子を伴い輜重（持ち出した荷物）を携^{たずさ}えて、湖や山の間に隠れ避難した。公（許琰）は、その日そうした家々を巡って罵った。五月九日、諸生たちは明倫堂に集まり哭禮を行なおうとした。縉紳や孝廉などは、あるものはやって来たし、あるものは拒み来ようとはしなかった。そして、あるものは喪服で、あるものは常服でやってきた。甚だしいのは張蓋^{はろ}（蓋を打ち開く乗り物）に乗ってきたのがいた。みんなは、群がって非難して罵った。公（許琰）は、葛麻の布帯で衰杖をつき、辟踊（胸を叩いて舞う）哭泣^{かなし}し哀みを盡くした。五月十一日、諸生はまた哭禮を行なった。御史の某（李模）は、やってきて文廟に拝謁するのに、楽隊を先導させ、喪服ではなく吉服（祭祀を行なう時の礼服）で入っていった。公（許琰）は、それを望み見て、たいそう驚いて、儀式を学んでいる者（童生）たちを引き連れて、進み出て、その衣服（宮員の制服）をはぎ取り、大義をもって責めたてた。御史の

某（李模）は、恐れ入って、謝罪して去っていった。南都（南京）では、福王由崧が監國の地位につき、使者を派遣して天下にそのことを布告した。ただ三月十九日に先帝（崇禎帝）が亡くなってから、五月十二日にいたるまで、すでに五十日を過ぎているのに、朝廷はなおまだ先帝（崇禎帝）の喪を発していないかった。公（許琰）は、嘆いて「私はもとより草莽の臣であるが、すでに諸生たちと非公式に學宮で哭禮を行ない、私の心はすでに尽きてしまった。速やかに死んでしまうべきである」といった。そこで、「正想捐軀報聖君、豈期靈日墮妖氛、忠魂誓向天門哭、立乞神兵掃賊羣（正に軀を捐てて聖君に報ぜんと想う、豈に靈の日々妖氛（不祥の雲氣）を墮つを期せんや、忠魂 天門（天宮の門）に向かいて哭せんことを誓い、立ちどころに神兵の賊羣を掃うを乞う）」という詩を書いた。そして夜になって自縊したが、家人が懸命に助けたので、亡くなることはなかった。明け方になって、こっそりと福濟觀の眞武廟の人に気づかれない場所に行って自縊した。道士の陸某が部屋で声がするのを聞き、すみやかに投縊を解いた。その住所や氏名を尋ねたが、答えなかった。もとより留めておくことはできなかったのので、送り返そうとした。だが、許琰はこれを拒んだ。一人で歩き、蘇州城北西の閶門を出て、閶門前の運河を臨んで、嘆いて「蘇州城の濁流である。我が体を投げ込むに値しない。その上人が多く、きっと阻まれてしまう」という。そこで、南方向にまがって行き、胥門に至った。運河が川幅が広がって流れが深いを見て、「これは胥江である。私は命をここで終えて、伍相國（伍子胥）の忠魂とともに上下からの逆巻く波濤となろう」という。とうとう飛び込んだ。たまたま潞藩（潞王朱常淐）が舟を河岸に泊めていて、許琰が飛び込むのを遠くから見つけ、人を走らせ救い出した。そのためまた亡くならなかった。潞王朱常淐は、許琰を召し出して理由を尋ねた。この時、許琰は体に「崇禎聖上」の四字を書いていた。[潞王の前なので] 遠回しに号泣し、潞王朱常淐に自分の心情を申し上げた。そのうえに、「主君の仇は報復しなければなりません。逆賊は誅殺しなければなりません。臣子は殉じなければなりません。私（許琰）が自裁しようとするのは、生きていることを恥じているわけではありません。ただ今の明朝の祿をいただきながら、變事にあたって殉じようとしめない者たち愧じているのです」という。潞王朱常淐は、たいそうそれを義にかなっているとした。道でそれを見物していたものは垣のようであった。ちょうどそこに許琰の友人の丁鉞武が到着し、無理やり支えて帰った。家人は、そのことを知り、みんなで自裁するのを防ごうとした。ところが許琰は、時を伺い死のうとしたが果たせなかったのので、ますます怒った。とうとう昼夜叫んで絶食を始めた。食事を勧めても、かたくなに拒んだ。ただお酒だけは飲んだ。そして、「少しばかり私の胸中の鬱屈した気持ちに酒を注いでやるのだ」といった。五月十九日、先帝（崇禎帝）の亡くなったことを知らせる詔が届いたことを告げると、庭で北に向かって拝し哭して声も出ないほどに悲しんだ。とうとう酒も拒絶し、人々の事や後の自分の亡くなってからの事を言わなくなった。慰めようとするものが、「公（許琰）はどうして、自分から苦しまれるのですか」という。すると、許琰は怒りのために大きく目を開いて、「聖天子（崇禎帝）はあのような悲惨な亡くなりかたをなさったの

に、私が忍んで食物を飲み下せようか」という。五月二十八日、飢餓が激しくなり嘔吐した。「半生磨礪竟成空、國破君亡値眼中、一個書生難殺賊、願爲厲鬼効微忠（半生の磨礪（練磨）竟に空^{むな}しと成る、國破れ君亡ぶは値^{ただ}（只）眼中にあり、一個の書生 賊を殺し難し、願わくは厲鬼と爲りて微忠を効さん）」という絶句を口述した。六月 朔^{ついたち}、胃には空になり何も吐けなくなり、血だけを吐くようになった。親戚や友人は、少量の飲み物を勧めた。許琰^{きょえん}は怒って大きく叫び、「あなたたちは、私がいたずらに生きながらえることを望んでいるのか」という。とうとう唇を噛み爛^{ただ}れさせた。六月二日、血も出尽くした。のどがひどく腫れ、舌を一寸あまり出すようになる。三日の申時（午後四時）、空に向かって三度にわたって「先皇帝」と叫んで、目をいからせて長くため息をついて亡くなった。時に、五十一歳であった。同志で友人の邱民瞻などが納棺し、私的に「潛忠先生」と諡を贈った。時に弔問に集まるものは数千人になった。著書六卷は、丁鉞武に与えられた。南京の福王弘光政権は、「翰林院五經博士」の位を贈り、湯文瓊とともに旌忠祠に祀らせた、という。

さて、許琰の殉節について、明末・清初の馮夢龍（字は猶龍・耳猶など、号は姑蘇詞奴・顧曲山人・墨憨齋主人など。江蘇呉県の人）と于重慶（江蘇金壇の人。崇禎四年辛未科（一六三一）二甲四十九名の進士）との間で、つぎのような議論があったと李清（字は心水、号は映碧、晩年は天一居士と号す。揚州興化の人。明・萬曆三十年〔一六〇二〕～清・康熙二十二年〔一六八三〕。崇禎四年辛未科〔一六三一〕三甲一百八十六名の進士）が『三垣筆記』で伝えている。

長洲の許生員琰（許琰）毅宗（崇禎帝）の縊殉するを聞き、慟哭して水に投じて死す。于少參重慶（于重慶）、崇禎辛未（崇禎四年）〔の進士〕、先に濟南道なるも國變を以て南歸す。同郷の馮紳猶龍長洲の人、名は夢龍。貢生、壽寧知縣たりと飲む。猶龍（馮夢龍）力めて〔許〕琰の忠を稱す。〔于〕重慶 曰く、「然らず。若し貧^もしきを憂うに非ざれば、則ち病を憂い、此れに假りて名を爲すのみ」と。猶龍（憑夢龍）其の言を斥く。〔于〕重慶 與に大闘するに幾し。衆 之を解きて乃ち已む（『三垣筆記』下・弘光）。

蘇州長洲の生員^{きょえん}の許琰は、崇禎帝が自裁されたことを聞き、嘆き悲しんで入水自殺した。于重慶〔崇禎四年辛未科（一六三一）二甲四十九名の進士〕は、以前は濟南道副司に任ぜられていたが、明が滅んだために、帰郷していた。同郷の馮夢龍と飲んだ。猶龍（馮夢龍）は、つよく許琰^{きょえん}の忠節を称えた。于重慶は、「そうではない。許琰は貧^{きょえん}しさを悩んだのでなければ、病気を悩んでいただけで、忠節に借りて名前を挙げただけである」といった。猶龍（憑夢龍）はその発言を否定した。于重慶と大喧嘩になりそうになった。まわりの人たちが、とりなしてその場は収まった、という。

于重慶、字は懌先、江蘇金壇の人で、崇禎四年辛未科（一六三一）二甲四十九名の進士である。康熙『金壇縣志』によると、

于重慶、字は懌先。工部主事を授けられ、夏鎮（江蘇沛縣東北四十里）の泉閘を督す。成都知府を歴て、分巡山東濟南道たり（康熙『金壇縣志』卷之八・選舉志・進士・「崇禎四

年」条)。

という。工部主事となり、夏鎮（江蘇沛縣東北四十里）の泉閘を監督する。そして、成都知府をへて、分巡山東濟南道となった人物である。

李清の伝えるような、こうした議論が行われたかどうか分からない。しかし、許琰が殉節した当時から、その殉節について懐疑的な見方もあったと言えないだろうか。そして、『呉城日記』と『蘇城紀變』の作者たちが、顧所受について言及していないことも、両者がそうした見方に通じるものを持っていたからだと考えることはできないだろうか。

(つづく)